

神戸地区だより つながり

2012年7月



“ふっこう丸”出帆！

～「ふっこうのかけ橋」プロジェクト最新情報～

号外

★“ふっこう丸”出帆！

～プログラムと予算案、地区評で承認

7月1日に開かれた神戸地区宣教司牧評議会において、「ふっこうのかけ橋実行委員会」の作成したプログラム及び予算案が承認されました。神戸地区を挙げての取り組みである「ふっこうのかけ橋」プロジェクトという大きな船が、いよいよ港を離れて出航です。

★司教様方も乗船

福島の子どもとお母さんたちの滞在期間中、8月2日に行われる明石海峡大橋クルーズに池長潤大司教様が、4日のキャンプ・プログラム全てに松浦悟郎司教様が参加して下さることになりました。

★募金総額 815,597 円に！

神戸地区の各教会から寄せられた募金の総額は、7月6日現在で 815,597 円になりました。皆様のご協力に心から感謝すると同時に、さらなる募金の呼びかけをよろしくお願ひしたいと思います。

★現地説明会開催

6月16～17日、実行委員会から3名のスタッフがプログラムや神戸の地図を手には福島を訪問。野田町教会と松木町教会の二手に分かれて説明会を行いました。単なる説明会ではなく、それぞれの抱える問題を共有する心豊かな分かち合いのひと時にもなりました。

★福島からの参加者 35 名に

これまで応募の無かった野田町教会からも1組の家族が参加を決意され、参加者は、7月7日現在 35 名になっています。内訳は子どもが 23 人、お母さんが 10 人、引率のシスターが 2 人です。東北の教会の現状を反映して、日本に永住しているフィリピン人のお母さんたちが多いのが特徴的です。参加者の増加により、愛徳姉妹会修道院と住吉教会に分宿することになりました。

★平和旬間行事も同時開催

8月4日 13時から愛徳学園講堂にて神戸地区平和旬間行事も同時開催されます。福島のお母さんやシスターが、放射能汚染の現実について語って下さることになっています。

★たくさんの方々の応援に感謝

このプロジェクトには小教区の皆様のみならず、車両や修道院施設また学校施設の提供に応じてくださったヨハネ寮、ヨゼフ寮、愛徳姉妹会、愛徳学園、教会学校リーダーと広く大阪教区の青年たち、また食事作りのために日頃の腕を発揮して下さる「炊出し連絡会」、お母さんプログラムには地区社会活動委員会の協力と驚くほどの多くの方々の「手と心と時間」がかけられています。皆様のご協力に心から感謝します。



現地説明会報告

すぐ隣にある不安

橋本直人(実行委員長)

今回福島を訪れて一番強く感じたことは、日々の生活のすぐ隣にいつも不安があるということでした。学校や公園・駅前には線量計が設置され、いやでも放射線量が目に入ってきます。福島では放射線量の数値が日常会話の中に普通に出てきます。これは、子供さんをお持ちのお母さんや学校の先生に多くお会いしたからかも知れませんが、皆さん自分の子供が通う学校の放射線量を気にしておられました。

そんな中で、短い期間ですが福島の方を神戸にお招きできるという事は、神戸地区にとって大変意義深く、また神戸地区ならではの改めて思いました。福島のお母さん・子供達は、私たちの想像以上にこのプロジェクトにとっても大きな希望と感謝を持っておられました。また、教会が招待してくれるというのも、福島の方にとって

は大きな安心感を生んでいるようでした。その安心感は、私たちが同じ信仰を持った兄弟・姉妹であるからこそ生まれてきたものだと思います。この『ふっこうのかけ橋プロジェクト』で、神戸の子供たちと福島の子供たちが出会い、共に遊び・笑い・祈る中で兄弟・姉妹の絆を強くすることが出来るように、後一ヶ月ありませんが、心を込めて準備していきたいと思います。

8月4日の神戸地区平和旬間行事では、福島から来られたお母さん・子どもたちも行事に参加します。どうぞ皆さん福島から来られる兄弟・姉妹と共にミサにあずかりにお越しく下さい。最後になりましたが、これまでのご支援・ご協力に感謝致します。そして、共に『ふっこうのかけ橋プロジェクト』を成功させるために、これからもご支援・ご協力をよろしくお願い致します。

神戸でまた会いましょう

山野真美子(事務局)

昨年9月、震災後半年にして初めて東北を訪れた。仙南を中心に1泊2日の駆け足訪問ではあったが、その年の「大阪教区平和祈願ミサ」に寄せられた献金を元に贈られた放射線測定器とその後の視察と交流が目的の旅だった。仙台空港に降り立ち、夕闇が迫る閑上浜、そして翌日、角田市から山間部の丸森、沿岸部の山元町を訪問。夕日の眩しい阿武隈川に沿って一路福島駅を目指した。夕暮れ時の福島駅周辺はネオンが煌めき、何事もなかったかのように通りを行き交う人々の様子は、夜の三宮と変わらなかった。あのとき、帰りの深夜バスの中で、阿武隈川の夕焼けのように放射能に色がついていたらいいのにとうすらボンヤリした頭で考えていた。今回も1泊2日の訪問ではあったが、駆け足ではなかった。分かったことは一部分でしかない。しかしゆっくりと話す機会が与えられ、「あれから」「ずっと」「ここで」暮らし続けている人々の生の声を聞いた。

「うれしいっー！夏休みに神戸に行って思いっきり外で遊べる、海にも行けるー！」と喜ぶ小学生がいる半面、「行きたいな、でも行ったらまた福島

のことを聞かれるかもしれない。もうこれ以上話したくない」と心揺れ動く年頃の中学生もいた。

暮らしを伴わず外から見ている私たちの思いと内で暮らす人々の思いには大きなひらきが当然ながらあり、あーだこうだと理屈をこねまわすのではなく、気が付いたら笑顔で寄り添っていたと言う関係が築ければと思う。17年前、壊れた街の様子を見ながら、「私たち、立ち直れるのだろうか」とふっとよぎった取り残され感を1年経った今、福島の人々は感じておられるのだろう。野田町教会訪問を終え、「じゃあまた必ず会おうね」と手を握り締めたとき「忘れないでほしい」と応えが帰ってきた。

“ふっこうのかけ橋”プロジェクトで迎える私達神戸は、彼らを取り囲んで特別の眼差しを向けるのではなく、今を共有することを大切にしたいと思う。「行って、見て、聞いて、感じた」今回の訪問であった。

この子たちは福島の子

松崎裕子(実行委員)

新幹線の福島駅に降り立った時、外は雨で、とても肌寒く感じた。さすが東北、神戸とは気温がこんなにも違うのか。周囲を山に囲まれ、生い茂る緑、大きな並木道、整然とした町並みを見る限り、震災の跡は全くといっていい程感じられなかった。

すでに到着していた先発隊に、野田町教会の信者さんと話した内容について聞いた。

土曜日ということもあってか、野田町教会はひっそりしていた。我々が来るということで、3人の信者さんが出迎えてくださった。

隣接する幼稚園では、震災後引越しなどで、園児の数が激減し、来年で閉園になってしまうそうだ。園庭には、放射線の数値を計る線量計が設置されていた。子どもたちは今も、1日2時間くらいしか外で遊べないらしい。

震災の直後は、情報もなく、放射能が大量に飛んできていたにもかかわらず、水や食料を求め、近所の避難所の校庭などに長時間並んでいたそうだ。「情報が混乱し、安全なのか危険なのか、一体どの話を信じたらよいか全く分からず疲れ果ててしまった。福島産の食べ物は一切口にしていません。支援にと頂いたお米も、1年以上口に入れることがためられ、捨てることも出来ず、今日まで至った。年老いた父と二人暮らし。せっかく頂いたものをもったいないからとようやく最近口にしました。福島人は福島産のものは食べません。」と男性の信者さん。「子供たちが町から減ってしまっさびしい。子ども達の未来を考えると不安で不安で・・・」と女性の信者さん。

その日は松木町教会の Sr. 江川の修道院に泊めて頂いた。「のどが渴いたでしょう。」と水道から水を汲み、氷をたくさん入れて私達に出してくださった。正直一瞬飲むのをためらった。おいしい朝食も用意してくださった。牛乳のパッケージに「福島牛乳」と書いてあった。出されたものは全て安全なはずなのに、昨日の信者さんの話が頭をよぎる。もし、赤ちゃんを抱えていて毎日をこの地で生活しなければならなかったとしたら・・・想像しただけでもいろんな不安が頭をよぎった。

松木町の幼稚園でも園児の数は減ってはいるが、

なんとか持ちこたえているようだ。教会へ来るお母さん方はフィリピン出身の方が多く、慣れない環境の上に今回の震災。言葉も理解できない状態で不安な毎日を過ごされていたが、シスターの方の祈りと励ましで、明るく前向きに生活しているようだ。日曜のミサの後、キャンプの説明会を行ったのだが、みなさんキャンプをととても楽しみにしておられ、活発な意見交換が行われた。子どもたちにも会った。みんな元気で明るい子達ばかりだった。「神戸で待ってるからね！」と手を振って別れた。

野田町教会の集会祭儀にも参加させて頂いた。ちょうど教会の守護聖人のお祝いの日で、マリア像前で記念写真を撮り、ティーパーティーにも参加した。たまたま席が一緒だったご家族と話がはずんだ。「ぜひキャンプに！」とお誘いすると、「背中を押してくれる人が欲しかった。」とキャンプに参加してくれることになった。

「お母さん、外で遊んでもいい？」と小1の男の子。「だめ、だめ、またこけるから、絶対ダメって言ったでしょ！」どうやら、なんとかして子どもを外で遊ばせたくないお母さん。なんとしてでも外で遊びたい子ども。毎日繰り返されるやり取り。いったいつまで続くのか・・・お母さんと子ども達のストレスはもう限界を超えている。園庭の線量計を見ると数値が0.2だった。なんとか大丈夫な数値らしい。「〇〇小学校知ってる？」と中1の女の子。「この前、その小学校の運動場は20だったんだよ。」どうやら、このような会話は子ども達の間でも日常的のようだ。

「野田町の子ども達のために祈って下さい。この子達は福島の子です。未来です。どうか忘れずに祈って下さい。」手をつなぎ、長い間互いに涙を流した。同じ子どもを持つ母親として、言葉は何も出なかった。ただただうなづくのが精一杯だった。「来て下さってありがとうございます。福島はみんな元気です。不安はたくさんあります。でもみんな笑顔だったと神戸に帰って伝えて下さい。」

雨が上がると地面や木から水分が蒸発し、それに伴い、空気中に放射線量が多くなるらしい。帰りはうそのように天気になった。気温も上昇し、

夏のような蒸し暑さとなった。駅前の線量計を見ると0.8。心なしか肌に浴びる日差しも痛く感じ、手で腕を払ってしまった。放射能浴びてしまった

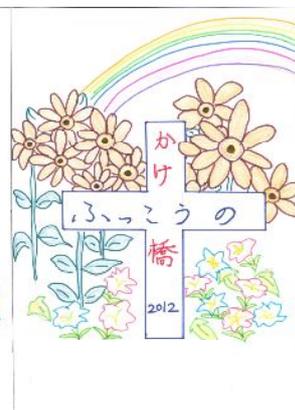
かな？ふとよぎる不安。ここ福島の人達は、この現実が毎日続いているのだ。今も、これからも・・・

「シャツ・デザイン募集に、ご応募ありがとうございます！」

これまでに寄せられた力作の数々をご紹介します。



FukuSiMa



編集後記

6月16～17日に福島で行われた現地説明会など「ふっこうのかげ橋」プロジェクトに大きな動きがあったので、急遽、号外を発行することになりました。神戸地区の力を一つに合わせ、福島の子どもとお母さんたちに最高の夏休みを過ごしてもらいましょう。(片柳)

カトリック神戸地区だより つながり

発行日	2012年7月8日
号数	号外
発行	カトリック大阪大司教区神戸地区評議会
発行責任者	片柳弘史神父
編集	神戸地区宣教司牧評議会広報委員会
ホームページ	http://catholic-kobe.org/